

2020年 5月3日礼拝式次第

日本基督教団半田教会  
横山良樹牧師

**招 詞** : ヨハネによる福音書 4章 23節

しかし、まことの礼拝をする者たちが霊と真理をもって父を礼拝する時がくる。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者たちを求めておられるからだ。

**讚美歌** : 21-472番（朝ごとに主は）より2番のみ

神がこの世を造られた日 その時のように 神は語る。  
神が与えた永遠の言葉、弟子たちのように 私も聞く。

**詩篇交読** 33篇

**祈 禱**

すべてのものを創り、歴史を支配される全能の父なる神さま、新しい月、5月を迎えました。陽はまぶしく、新緑は鮮やかで、つつじを始め、花々が咲き誇る季節の訪れです。しかし、新型コロナウイルスによる世界の混乱はいまだ収束の兆しを見せていません。主よ、どうかわたしたちを憐み、助けて下さい。わたしたちの地域でも3月14日以来の感染者が出たことが報告されています。こうした中であって願うことは、わたしたちの命をあなたが凶らっていて下さることを信じて、あなたによる落ち着きを与えられることです。預言者イザヤはエルサレムの喉元まで迫った敵の前で「あなたがたは立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」との主の御言葉を取り次いでいます。とくに今苦しんでいる人、感染者や、その家族、医療や福祉の現場で戦っておられる方々の心と体と魂の健康が支えられますよう願います。いまこうして集められた者、ここには集いませんが音声や、文書を通してあなたを仰いでいる一人一人を顧みてください。どのような時も、主が生きて働かれることを信じて、あなたの御名を崇めることが出来ますように、半田教会のひとりひとりをあなたが強めてください。感謝と賛美に生きる群れとしてください。今日も御言葉を通して、あなたの命に触れさせてくださり、わたしたちをあらたに作り替えて

ください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

**聖書朗読**：マルコによる福音書 12 章 41～44 節

イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。

**讚美歌**：21-132 番「涸れた谷間に野の鹿が」（1 番）

涸れた谷間に野の鹿が 水を求めてあえぐよう  
かわき苦しむ わが魂  
命の神を ただ、したう。

**説教**：「献身のしるし」

イエスさまの教えは福音書を読みますと、命とお金にまつわるものが非常に多いことに気づかされます。これはわたしたちの関心がそこにあるからで、命とお金の問題を、神さまとの関わりで整えることが出来るかどうかは人間の救いにとって決定的であると、イエスさまがよく知っておられたからにほかなりません。その意味で今朝わたしたちに与えられているやもめの献金の出来事は多くの示唆を与えるものと言ってよいでしょう。今朝はここからみ言葉に聴いてゆきます。

まず、今回この個所を読みまして、わたくしが改めて、ああ、こんなことが書いてあったのかと驚いた個所があります。それは 41 節に「イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた」というところです。皆さんも想像してみてください。イエスさまが賽銭箱の向かい側に陣取って、みんながどういうふうに関心をささげるか、どれくらいささげるかを見ておられたら？！「イヤ、それ見ないで！」と言いたくなりませ

んか。目の前にイエスさまがおられたら、自分のささげるものがこれでいいのかと思わないでしょうか。いつもは後半のやり取りに注意が向いていましたが、「賽銭箱の向かいに座って、群衆がお金を入れる様子を見ておられた」という個所に目が留まり、基本的な事実に戻らされました。それはお金を献金箱に「出す」のではなく、イエスさまに「ささげる」のだということです。「ささげる」感覚がいつのまにか自分から失われているのではないかと悔い改めを迫られました。よく献金のお祈りに使われる言葉にしたがえば、わたしたちの「献身のしるし」としてささげられるものが献金です。教会の活動も世の中と同じようにお金によって動きますが、それはすべてわたしたちが神さまにささげるお金によって、祈りと信仰がかたちとなった献金としてささげるものであるし、扱われるべきものであるという教会の命に係わる事柄が、向かい側に座ってみておられるイエスさまというマルコの記述から浮かび上がります。

そこに大勢の金持ちがたくさん入れるのに混じって、ひとりのやもめ、—これは夫をなくした女性のことで社会的弱者の象徴です—、その女がレプタ二枚をささげた。これは当時のイスラエルではもっとも価値の低い貨幣二枚です。しかもそれは彼女の全財産であったというのです。それを向かい側に座っておられたイエスさまは見て取って、弟子たちを呼び寄せて、はっきり言うておく、この貧しいやもめは誰よりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は乏しい中から自分の持っているすべて、生活費を全部入れたのだと褒められました。

さて一昨年秋、四国教区議長の黒田若雄先生をお呼びして中部教区の役員研修会を持ちました。主題は「神の栄光をあらわす教会会計」で、献金のこと、教職の謝儀のことなど財政的に厳しさを増す中で教会にとって本質的なことは何か、世の中の会計と教会会計は何が違うかという講演をして頂きました。そのときに、黒田先生は、このやもめのレプタ二枚の話を引きかえて、イエスさまがここで見ておられるのは金額ではなく、その人の志の重さを見ておられると言われました。実際の金額としてレプタ二枚は金持ちがささげている金額とは比較にならない小さな額です。しかし、その人にとってそれが生活費すべてであった。それをすべて神にささげたという覚悟、志の重さを主はご覧になり、それを褒められたと言われたのです。なるほどと思いました。ふつうに考えるなら、生活困窮者が手持ちの生活費全部を献金したと聞いたら、わたしたちは愚かな行為だと思うでしょう。しかし、黒田先生はそこに献金の秘密がある、志の示された献金によってはたらく教会会計の特

別さがあると考えておられたのです。関連で、わたしとゆずりが教会から頂くいわゆる「報酬」は、サラリーとか月給とか、そういう言い方をせずに「謝儀」という言葉を教会では使います。これについて忘れられない経験がわたしにはあります。1995年に半田教会に赴任したとき、わたしは春日井に住んでいた叔父のところに挨拶に行きました。父の弟だった人で名古屋にある、中小企業大手の人事部長を定年まで勤めた人でした。近くに来てよかったと叔父は喜んでくれ、話の流れで、それで良樹くん、幾らもらうんだと聞かれました。それでわたしが「謝儀は、」と言いかけると叔父はわたしをさえぎって、「謝儀とはなんだ。聞いたことがない」というのです。それでわたしが説明すると、話を聞き終えた叔父は「そんな賃金体系のはっきりしない職業に未来はない」と言いました。忘れられません。父と違い、叔父はキリスト者ではありませんでしたので、信仰とか、献金とか、ささげられたものによって生かされる伝道者の生活ということが全く想像できなかつたようです。ここからはさらに余談ですが、この謝儀をいただくときに半田教会では一種のセレモニーがありまして、役員会の時に会計報告の場面になると、会計役員の方が謝儀と書かれた封筒をもって立ち上がり、役員も一斉に起立。わたしたちも立ち上がって封筒を押し頂き、有難うございます。役員も頭をさげて有難うございます、というのです。夏期伝道に来た神学生がいつも吃驚する場面です。ただ今はもう銀行振込みの時代ですから、明細を記した紙の入った封筒を手渡すことに意味はないのではないかとということで、会計役員から止めましょうかという打診を受けています。しかし、わたしたちはこれを続けて欲しいと願っているのです。それは役員に頭を下げさせたいのではありません。わたしたちが頭を下げたい。教会にささげられた感謝の献金によって支えられているという原点を忘れないためです。わたしたちが謝儀によって養われていることを忘れたくないのです。ささげられた献金がたんなるお金になってしまうことを避けたい。文字通り、教会員の皆さんの、志の重さによって伝道者が支えられていることへの感謝の思いを失いたくない。その意味で、このセレモニーを大切にしたいと願っています。

最後に、このやもめのレプタ二枚の献金の話は、じつはこの福音書では、イエスさまが弟子たちを呼び寄せて語られた最後の教えになります。この二日後にイエスさまはユダの裏切りによって捕らえられ、三日後には十字架で死なれることになるのです。するとこの出来事、やもめが自分の生活費のすべてを神にささげた。献金した出来事は、この後に、わたしたちのために十字架に命をささげられるイエスさまの志の重さ、使命の重さの先ぶれとして

読めるのです。身寄りのない者が命綱である生活費すべてを献金することは愚かな行いにしか見えません。常識的には命をみずから捨てる愚かな行為にしか見えない。わたしの命に、わたしがしがみつけば、当然そういう結論になります。しかし、全財産レプタ二枚を献金箱にささげたやもめにとっては、お金が命を支えるのではなく、神がわたしの命を支えるのだという信仰、神への最大限の信頼のしるしだったのです。命よりも大切なものがあることを指し示したやもめの献身は、キリスト・イエスの十字架の死につながる出来事なのです。罪びとのためにみずからを神にささげた「愚かな」行いによって、人類の救いが成し遂げられたことを思い巡らすとき、命とお金を「使う」のではなく、「ささげる」生き方について、わたしたちはイエスさまから問いを投げかけられていると思うのです。

お祈りいたします。

神さま、手元に何を残すかをいつも考えるのがわたしたちです。新緑の美しい季節、野の花、空の鳥を見て、わたしたちの命のことを思い計らっておられるのがあなたであることに気づかせてください。ささげること、わかちあたえることによって開かれる信仰の奇跡を、主よ、あなたが見させてくださいますように。どうか、わたしたちのなすことがいつも主イエスの御前に届いていること、わたしたちがキリストの御名によって生きる者とされていることを覚えさせてください。この場から聖霊の風にのせて、主イエスとともにそれぞれの持ち場へとわたしたちを送り出してください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

**s s s 讚美歌 21-512 「主よ、献げます」(4番)**

主よ、献げます、わたしの愛を、  
知恵も力も、宝もすべて。  
わたしのうちに あなたが住んで  
みむねのままに 用いてください。

**献 金**

**報 告**

添付の週報をご覧ください

祈 禱

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策  
下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、とも  
に礼拝をささげる日が与えられるように。

主の祈り

天にまします我らの父よ  
ねがわくば御名をあげめさせたまえ  
御国を来たさせたまえ  
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく  
我らの罪をも ゆるしたまえ  
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、  
父なる神の愛と  
聖霊との親しき御交わりが  
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く  
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！